



錦鯉の池と塩 – 効かせる濃度と、効かせすぎない管理

h2koi.com · 2026-08-04

要点

- いちばん根拠のはっきりした用途は**亜硝酸対策**です。塩化物イオンが鰓での取り込みで亜硝酸イオンと拮抗し、ろ過が回復するまでの時間を稼ぎます。
- 常用・補助の目安は**およそ0.1～0.3%（1トンあたり1～3kg）**。治療目的で**0.5%程度まで**上げるのは短期間に限り、指導を受けたうえで行います。
- **塩は蒸発せず、消費もされません**。抜けるのは排水をとまなう水換えと希釈だけです。目分量で足し続けると、思っている濃度をはるかに超えます。
- 必ず**実際の水量から計算し、測定して確認**します。塩分は導電率として見えるため、継続的に把握できます。

濃度	1トン（1000L）あたり	位置づけ	期間の考え方
0.1%	1kg	ごく低い常用域	長期でも負担は小さい
0.1～0.3%	1～3kg	一般的な常用・補助。亜硝酸対策の中心	不調が収まるまで、数日～数週間
0.3～0.5%	3～5kg	短期の治療域	指導を受け、期間を区切って
0.5%超	5kg超	推奨しない	濃度そのものが負担になる

塩は亜硝酸を消しません。やっているのは「鯉が耐えられる時間を延ばすこと」だけです。同時に給餌を絞り、水換えで亜硝酸そのものを薄め、ろ過が戻るのを待つ必要があります。塩を入れて安心し、餌をそのまま与え続けるのが最悪の組み合わせです。

この話題でH2Koiができること。産業用グレードのセンサーで導電率を直接測定し、そこから塩分（塩分濃度）を計算値として連続的に表示します。塩を入れた瞬間の立ち上がり、水換えごとの下がり方、掛け流しでじわじわ薄まっていく傾き——これらが線として残るため、「今どのあたりにいるか」を推測ではなく履歴として確認できます。

できないこと。寄生虫や病気そのものは見えません。塩を入れるべきかどうかを判断することもできません。それは鯉を見ている人の仕事です。またH2Koiの塩分は、導電率の実測から求める計算値です。治療濃度をかけるときは、専用の塩分濃度計で数値を確認してください。ここは正確な値そのものが効く場面で、計算値をよりどころにすべきところではありません。H2Koiができるのは、変化に早く気づくための、疲れを知らない継続的な目になることです。